

仏典の中の樹木

—その性質と意義— (4)

満久崇磨*

Trees in the Tripiṭaka (4)

Takamaro MAKU

緒言

本報は主として国訳一切経律部にあらわれる樹木を通して、古代インドの比丘、比丘尼たちの生活の1断面をながめたものである。

修行する比丘、比丘尼の生活には当然一般俗人のそれと異なった面もあろうが、反面、ややもすれば人間本来の性(さが)にもどろうとする比丘たちの生活の規制は、とりもなおさず当時のインド庶民の生活の反映そのものであり、これはまた当時の東南アジア諸国の一般庶民生活の投影ともいえよう。

というのは、紀元前後から数世紀にわたって体系づけられた仏教思想は急速にタイ、ビルマ、ラオス、カンボジア、マレーシアおよびインドネシアの諸国に浸透して、これらの国々を「インド化」し、その法典、行政、学術、芸術などの広い範囲にわたって大きな影響を与え、13世紀頃までサンスクリット語がこれらの国々の共通の思想基盤になっていたからであり(市村真一編、東南アジアを考える——石井米雄、東南アジアの歴史と文化——)、現在わが国の木材工業の半を支える東南アジア材の樹木名にもしばしばサンスクリット語の借用形が見出されるのもこの歴史的な事実を物語るものであろう。

律部には本報に記載したもの以外に多くの樹木が登場するが、第1～3報と重複するものはなるべく省略し、また本報の範疇には入らないものは次の機会にゆづることにした。

1 地球創世と両性の出現

根本説一切有部毘奈耶や同破僧事卷1によると、遠く古い昔、宇宙蒼茫の頃、この世には太陽なく、月なく、星もまたなく、したがって昼夜の別なく、時間、季節、歳月の感覚もなく、男性なく女性なく、一切の衆生は身に光明を放ち、空間を自由に飛び、喜楽を食(じき)とし、驚くべき長寿を保っていたという。

しかし、たまたま1衆生が地上に下り立ち、地味を食べたことから、多くの衆生もこれにならい、やがて地味が無くなると、次に地餅を食べ、地餅が無くなると林藤を食べた。しかし、一旦この禁断の味を知って以来、衆生はその身から次第に光明を失い、食の大小によって、容貌体格に差ができ、互に他をあなどり、この世に悪法を生じ、やがて世界は暗黒となり、太陽、月、星が起り、昼夜の別、季節、歳月の別を生じた。

地味(Prithivi-rasa)は earth sap を意味し、当時大地の表面はあたかも熟乳のごとく、また地餅(Prithivi-parpaṭaka)は多くの仏典では地表に生じた薄い餅となっているが、parpaṭakaには medical plant という意味がある。林藤(Vana-latā)もいろいろの意味をもつが、これを *Panicum Italicum* L. (キビ属)と考えると、話はやや現実的になる。一説には地餅の色はカルニカーラ(モミツバウラジロ *Pte-*

* 木質材料学部門 (Section of Composite Wood)

rospermum acerifolium Willd.)*の花の色、林藤のそれはキャダンバ (*Anthocephalus cadamba* Miq.)の花の色のごとく、その味はいずれも新熟の蜜のごとくであったというから、おそらく地餅は白色芳香、林藤は黄白色芳香をもっていたのであろうか。キャダンバの果実は食用になり、果実酒は Kadambari とよび、しばしばインド古典に引用される有名な古酒である。

さてこのようにして食料が変わるにしたがい、衆生は次第に光明を失い、やがて男女の性別ができた。こうなるともはや悪魔に魂を奪われたも同様で、たちまち墮落して非法を行うようになるのはこれまた当然であらう。遠い昔は現代と違って、男性が女性より強かったらしく、男性を女性の支配下におくための薬も随分古くから研究されていたようである。根本説一切有部毘奈耶破僧事卷12によると、チベットでは麦粉をやいて中に大根をつつみこんだ薬用食1 相愛丸薬(?)が非常に効力があつたそうで、ヤショーダラがゴータマ菩薩の心をとらえ遁世を防ぐために、この薬を買い求めて食べさせようと努力したが、ことごとく失敗に帰したと伝えられている。

それはともかく、こうして男女の性別ができてしまうと、後年になって、原始の喜楽食時代にかえるべく修行中の比丘、比丘尼にとって最大の苦行の1つは禁欲生活であり、性的に清浄であればある程この苦悩は大きかったであろう。したがって、仏典戒律にはsexや恋愛に関連したものがかなりの紙面を占めており、これを詳しくみると当時の男女間の相がうかがえて興味深いものがあると思われる。

「もし比丘尼にして樹膠(脂)をもって生支(男性のシンボル)を作らんに波逸提(悔悟反省を求める程度の軽罪)なり」(根本説一切有部苾芻尼毘奈耶卷17)

断ちきれぬ煩惱にもだえる比丘尼の姿が目の前に浮ぶ思がするが、それにしても人類は随分古くから樹脂を多方面に利用していたようである。

ある日のこと、比丘尼たちが川にはいって水浴をしていたが吐羅難陀比丘尼だけは急流に立って水に逆らい触樂をうけていた。

「何をしていらっしゃるの」

「触樂をうけているのよ」

「まあいやらしい」

「どうして? いけないなんていう規則はどこにもないじゃないですか」

この話が比丘尼達から比丘達へ、比丘達から釈迦へと伝えられた。

「諸尼駛(急)流に逆立ちて、その触樂をうくるべからず。もし樂をうけんには吐羅低也罪(?)なり」(根本説一切有部毘奈耶雜事卷34)

中にはなかなか気のきいた戒もある

食(じぎ)は本来心身を增長資益するものを意味する。男は女を以て食とし、女は男を以て食とし、相愛するがゆえに、これを食という。

「有食家(スイートホーム)なるを知りつつ、強いてために住止せんに波逸提なり」(根本説一切有部毘奈耶卷37)。

人の恋路の邪魔する奴は犬にくわれて死んでしまえという訳でしょう。

年若い少年がオバサマ族に魅力を感じて、心をひかれるのは、あえて現代のみならず遠い昔からの人間の習性のようなのである。昔ある長者に美しい夫人がいた。5人の少年がこのオバサマに魅惑されてデートを申込んだ。困った夫人は

「それでは今夜ニグローダ(ベンガルボダイジュ *Ficus bengalensis* L.)の所で会いましょう」

という訳で、A少年にはニグローダの東枝の上で、B少年には西枝の上で、C少年には南枝の上、D少年

* 文中の樹木名のうち括弧内に梵語名、和名または学名をふしたものは原則として第1～3報ですでに説明したものである。

には北枝，E少年には中枝の上で待っていらっしやいと約束する。少年達は互に何も知らず，それぞれ約束の場所で暁まで夫人をまったが，とうとう彼女はあらわれなかった。

A少年「太陽が出て，農夫が田に向っている。だが夫人はまだやってこない。彼女はうそをついたのだ。もう降りよう」

B少年「夫人は必ず来るだろう。うそなんかつく筈がない。今朝はどうして太陽がこんなに早く登ったのだろう」……（根本説一切有部毘奈耶卷37）

尸利拔比丘は偷羅難陀比丘尼が好きだった。何とかして彼女に会いたくて，ある日会合に事よせて彼女を誘ったが，彼女は病気にかこつけて行かなかった。彼は早速病氣見舞を口実に彼女の許をたずねた。

「どこが悪いのですか」

「関節のふしぶしが痛むのです」

彼は彼女をマッサージしながら尋ねた

「何か食べたいものはありますか」

「乾棗 (*Zizyphus jujuba*) がほしいんですけれど」

彼が乾棗を買ってきて彼女にあたえると，彼女はそれを手に捧げて彼にたずねた

「この乾棗が見えますか」

「もちろん見えますよ」

「してはいけない事に心を奪われますと，丁度この乾棗のように心が干からびて縮まってしまうそうですね」

とやんわり釘をさされる。（弥沙塞部和醯五分律卷11）

最後にアショカノキ (*Saraca indica* L.) にちなんだ美しい恋の物語り。アショカはサンスクリット語で a (not) śoka (sorrow) という意味をもち無憂樹と訳されているが，スダナ王子がキンナラの王女マノハナーを探し求めて，美しい赤い花の咲き乱れているアショカノキの下で

「汝の名は憂なしという。私をして憂なからしめよ」

とかき口説く。彼はようやく仙人の下にたどりつく。

「あなたは樹皮の衣をつけ，常に最上の根芽，アーマラーカ (アンマロク *Phyllanthus Emblica* L.)，ビルバ (ベルノキ *Aegle Marmelos* Corr.) カピッター (ナガエミカン *Feronia elephantum* Correa.) の果実を食べています。私はあなたを礼拝します。どうかマノハナーのいる所を教えてください」

仙人はマノハナーに教えられていたキンナラ城への多難の道を王子に教える。王子はこの道をたどって幾多の困難をのりこえて，ついにキンナラ城の見える所まで辿りつく。キンナラ王は王子の容姿端敵なのを見て驚いたが，まず技芸の腕前をためそうと思い，高さ7ターラ (オーギヤン *Borassus flabellifer* L. 7本の高さ) の金の柱と7玄の7個の鼓を作らせて大リセプションを開いた。宴たけなわの頃王子はキンナラ王の請に応じて青蓮華のごとき太刀をもって金の柱をあたかもキャダリ (バナナ *Musa sapientum* L.) の葉のごとくきり，1矢を以て金の柱と7個の鼓を射ぬいた。キンナラ王はこの希有の腕前をみてついにマノハナーを妻にすることを許したという（根本説一切有部毘奈耶薬事卷14）。

2 薬事・食事・鉢・楊枝

薬事

十誦律卷26，摩訶僧祇律卷3，毘尼母經卷7，根本説一切有部毘奈耶薬事卷1，根本薩婆多部律撰卷8などには各種の樹葉，草葉などのいわゆる生薬や漿水などが登場するが，後者は薬というよりもむしろ refreshment (ジュース) と考えた方がよさそうである。

もっともジュースといっても日本のようにいちいち天然果汁何パーセントなどと断らなくても，文句無し100%で栄養薬効満点であつたらう。これらも仏典によって必しも一致しないが，确实と思われるものを整

理すると

(1) 漿 水

- 葡萄漿 (蔑栗墜, ブドウ *mṛidvikā*)
- 菴羅漿 (周梨, マンゴー *āmra Mangifera indica*)
- 閻浮漿 (ジャンボラン *jambu Eugenia Jambolana*)
- 芭蕉漿 (茂梨, バナナ *moca Musa sapientum*)
- 拘楼漿 (ココヤシ *coca Cocos nucifera*)
- 石榴漿 (孤洛迦, ザクロ *dādima Punica Granatum*)
- 棗 漿 (ナツメ *badara Zizyphus jujuba*)
- 末度迦漿 (イリッペ *madhūka Madhuca latifolia*)
- 菩提子漿 (インドボダイジュ *Ficus religiosa*)
- 烏曇鉢羅漿 (ウドンゲノキ *Ficus glomerata*)
- 甘蔗漿 (サトウキビ *ikshvāti*)
- 捨楼漿 (レンコン *sāluka*)
- 渴樹羅漿 (インドサトウヤシ *kharjūra*)
- 波盧沙漿 (インドウオトリギ *pāruṣaka*)

などの外、葷菜(コショウ)、乾薑(ショウガ)、鬱金(ウコン)などもあげられ、仏典によってはこのうちから主なものをピックアップして8漿水、14漿水などとも呼んでいる。

これらはいずれも時(午前)以後に服用することを許されているので非時漿、時分漿などともいう。

根本説一切有部毘奈耶藥事卷20によると、釈迦は仙人ケイナシが8漿水を捧げたとき

「比丘たちよ、この8漿水は時に受納し、非時にも服用すべく、初夜(夕方から暁まで、あるいは午後8時)を過ぎては服用すべからず、……」

と詳しくその服用法を教えている。

また葡萄漿は「正によろしく押し葡萄汁をとり熟煎して盛貯し非時漿飲に供すべし」(根本説一切有部毘奈耶藥事卷9)と説かれているから、単なるジュースではなく末度迦漿などと共にかなりアルコール分の多い飲物であったのかもしれない。芭蕉漿の梵語 *moca* にはバナナ以外にワサビノキ *Moringa pterygosperma* Geartn. 説もあるが常識的にはバナナとするのが妥当であろう。なおインドボダイジュの葉や果実は飢饉の時を除いて、ふだんはあまり食用にしないから、菩提子漿はむしろ信仰的な意味が強いと思われる。

(2) 根 菜

- 香附子 (カヤツリグサ *Cyperus Rotund*)
- 鬱 金 (ウコン *Curcuma longa*)
- 生 薑 (ショウガ *Zingiber officinale* Rosc.)
- 菖 蒲 (ショウブ *Acorus calamus* L.)
- 白附子 (トリカブト *Aconitum carmichaeli* D.)

(3) 葉 菜

- 紅葉樹葉 (インドセンダン *Melia Azadirachta*)
- 婆奢迦葉 (ロカイ *Aloe* spp.)
- 高奢得枳葉 (*kosataka*)
- など

(4) 茎 菜

- 沈 水 (ジンコウ *Aquilaria Agallocha*)

梅 檀 (ビャクダン *Santalum album*)

黄 柏

(5) 果 葉

菴摩勒果 (アンマロク *Phyllanthus emblica*)

訶梨勒果 (ミロバラン *Terminalia chebula*)

毘醯勒果 (セイタカミロバラン *Vibhitaka*)

など

これらの根葉、葉葉、莖葉、果葉は尽寿薬ともよばれ、必要に応じて随時服用することを許され、とくに果葉は、有病、無病、時、非時にかかわらず何時でも食することができ、時薬と尽寿薬を相和した場合は時に服用し、非時には服用を許さず、尽寿薬と非時薬を相和した場合には初更分(午後8～10時)を限って服用を許すなど、詳しくその処方、服用法が説かれている。

この外、根本薩婆多部撰卷8では毒消しに

1. 新生犢の糞尿
2. 尼拘律樹(ベンガルボダイジュ)の灰
3. 菩提樹(インドボダイジュ)の灰
4. 烏曇鉢羅樹(ウドンゲノキ)の灰
5. 甘草の灰

の5種をあげているが、これらは全く信仰的なものであろう。なお甘草はの場合第3報でのべたように末度迦樹と考えるのが妥当である。

以上の樹木類のうち未出のものについて説明すると

1) サトウキビ属 *Saccharum* spp. とイネ科の植物

サトウキビ *S. officinarum* L. Ikshvāti

サトウキビの原産地はインドのガンジス川流域といわれ、随分古くからインドで栽培され、そのしぼり液は糖分以外にビタミンや蛋白質を含み、栄養価が高く、インドから東南アジアにかけて重要な食品の1つである。

グダジャーラヴァダーナ(奈良康明訳 仏典I)によると、昔王舎城に1人の長者がいて、砂糖黍をしぼる大工場をもっていた。たまたま城外に住んでいた辟支仏(独自に悟をひらいた尊者、独覚、縁覚ともいう)が病氣にかかり、医者から甘蔗漿をのむように指示された。彼はある朝王舎城にゆき、長者の工場に足を運んで1鉢の甘蔗漿を乞食した。長者は所用があったので使用人に漿水を差上げるように命じて外出したが、使用人は自分のものでもない漿水の供養をおしんで、鉢の中に小便をいれ、その上に漿水を少し加えて辟支仏に与えた。辟支仏は神通力によってこれを見通していたから、漿水を工場の隅にすてて立去ったが、元来けちで悪行を行い、三悪道におちる性格をもっていたこの使用人は、その後数々の罪を犯して餓鬼道におちたが、後年釈迦の高弟大目犍連が餓鬼道を遊行中、飢渴にさいなまれ、のたうっていた餓鬼は実にこの男であったという。

また根本説一切有部毘奈耶雜事卷17によると、ある男がサトウキビ畑をあらして、よい所だけをとって残りをすてて立去った。これを見ていた六群比丘(悪行比丘6人組)がまだ食べられる所があるだろうという訳で畑にはいつて残物をかき集めていると、畑の持主がやってきた。

「あんた達は大仙の服をきていながら何ということをするのだ」

「いやこれは誰か他人がやったんだ。われわれはその残りを集めているだけだ。別に悪い事ではあるまい」

「いやいけない。出家のすることではない」

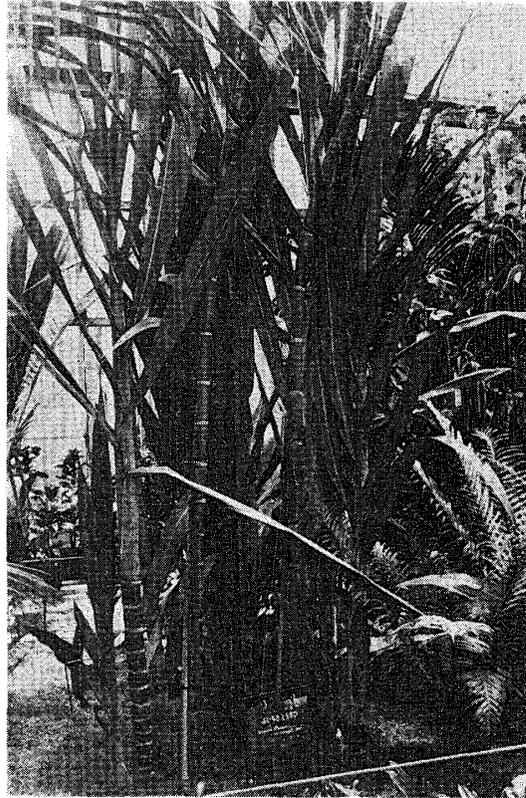


写真1 *Saccharum officinarum* L. var. *variegata* Hort.
ファイリサトウキビ (名古屋, 東山植物園)

この事が仏に伝わった。

「正にかくのごとくにして糞掃物(残物)をとるべからず。なさんに越法罪(自己の本誓に反する罪一重罪)なり」

サトウキビ以外のイネ科の植物も仏典によく引用される。

「鉄または銅, 鉛錫, 白蠟あるいは竹, 木, 葦もしくは舎羅草を用いて, 針筒(針をいれる筒)を作るは不犯なり」(四分律卷19)

「クサ草衣, ムンジャ草衣, バッバジャ草衣を著するは突吉羅(軽犯罪)なり」(十誦律卷27)

これらの衣には虫がつきやすいためであろう。

「ムンジャ草, バッバジャ草, クサ草, カーシイ草は皆わが敷具(しきものやはきものしきわら)なり」(弥沙塞部律卷21, 23)

これらの草やターラ(オーギヤシ)の葉などではきものも作っていたようである。

「私は遠離の思に専注して, ムンジャ草, ポータキラ草, バッバジャ草, クサ草, ダッパ草, ウシーラ草などを胸から取除かう」(長老の詩 早島鏡正訳 仏典I)

「キビ, チーナカ豆などを乞食して, 貪らず, 偽らない……」(Sutta nipātā, 中村元訳 仏陀の言葉 岩波書店)

舎羅草 *Saccharum Sara* Aitchis, Śarā, サラ草

この草をタカオススキ属 *Erianthuss Griffithii* Hook. に入れる人もあるが, チベット, アフガニスタン地方に分布し, 桿が堅く丈夫で, 古くから矢に使われていたようである。

文若草 *Saccharum Munja* Roxb. Muñja, ムンジャ草

インド全域の平野部に自生, 中国にも分布し, 高さ7mに達する。若い穂は食用になるが, この桿でバラ

モンの象徴である Brahminical Girdle (Kāyabandhana 腰に巻く組ひも) やバスケットあるいは良質の紙を作る。

「腰条に3種あり、1に圓(平うち)、2には方(四角)、3には円なり。これに異らんには越法罪なり」
(根本説一切有部毘奈耶雜事卷7)

古代インドではムンジャ草を口にくわえることは降伏の意志表示ともいわれるが、反対に、かつての日本軍のように断じて退くことをしない固い決意を示すものとも推察されている。

ポータキラ草 *Saccharum spontaneum* L. Potakila (パ), Potagala (サ), ワセオバナ

インド、セイロンの温帯、南欧、東濠にも分布する。ヒマラヤ地方では高度2,000 mまで生育する。桿長3~7 mで現在のサトウキビの優良品種の祖先といわれている。

バツバジャ草 *Eleusine indica* Gaertn. Pabbaja, Babbaja (パ), Balbaja (サ), オインバ

イネ科の雑草で、インドまたはアフリカ原産とされ、熱帯、温帯に分布、種子は食用、桿で組ひもを作る。この変種 var. *coracana* Makino ショクビエは日本では四国ではじめて栽培されたのでこの名がつけられたといわれている。一種の救荒植物で中尾(中尾佐助, 栽培植物と農耕の起源 岩波新書)によると、ショクビエはインド、東南アジア、中国、台湾そして日本へと文化伝播の先駆者として栽培されたサバンナ農耕文化の指標的植物であるという。

ダツバ草 *Imperata cylindrica* Bed. Darbhā, チガヤ, 茅草(第3報参照)

クサ草 *Poa cynosuroides* Retz, Kusa, 吉祥草

インドの平野部やビルマ、北アフリカ、シリアに分布する1年または多年生草。釈迦在世当時あるいはそれ以前から庶民はもっぱらこの種の草を敷物にして、この上で休息をとっていた訳であるが、クサ草はこれの中でも別格で護摩壇や菩薩達の坐禅専用の敷草として神聖視されていたようである。

「クサ草の柔軟なること都羅綿のごとし」(衆許摩訶帝経巻5)

チーナカ *Panicum miliaceum* L. Cinaka

インド、アフリカの熱帯地域から東部アジアの温帯にかけて自生または栽培されているキビで、子実は蛋白質にとみ独特の風味がある。酒や菓子原料。糠や葉桿は飼料。密教護摩壇にさざげられる 弘利曳応旧 priyāngu は同属の *P. italicum* L. をさすとも推定されているが、これも熱帯インドから温帯地方にかけて栽培され、中国、日本にも分布しているといわれる。

2) インドサトウヤシ *Phoenix sylvestis* Roxb., Kharjura 渴樹羅樹

樹高8~12m, 樹幹直径約40 cm に達し、葉は羽状複葉で頂生叢出、花梗の切口から甘い液を出し、これを煎つめて砂糖の代用にし、醱酵させて酒を作る。インド原産で、その全域からビルマまで栽培されている。

3) パールシャカ *Grewia asiatica* L. W. & A. Pārusha (ka), 波盧沙迦樹

8漿水の1つパールシャカは花もきれいで、大方等大集経巻19や大宝積経巻62, 正法念処経巻18などによると、釈迦がカピラ城外のニグローダ(ベンガルボダイジュ)園で父王シュツドダーナに法を説いた時、諸天、天華、抹香と共にパールシャカの花を仏身にふりそそぐ。この樹木については次の2説がある。

Grewia asiatica L. W. & A. (インドウオトリギ)

Xylocarpus granatum K. (ホウガンヒルギ)

後者はセンダン科ホウガンヒルギであるが、果実が賞用されることから前者とするのが妥当である。樹高約10mに達する半落葉性の高木で、不規則な巨歯のハート形の葉が互生し、直径約2 cmの黄色の花が咲く。果実は球形で甘酢ぱく、生食でき、砂糖漬にもする。インド各地に栽培され、北アフリカからオーストラリアの熱帯地区まで分布している。

材は淡黄褐色で、気乾比重0.67~0.77, 繊維は直通で、材質は *Pterospermum* spp. にて比較的強く、

弾性係数も高いので、同属の *G. tiliaefolia* V. (オーバウトトリギ) と共に農機具、車輪、工具類、ピッケルアーム、テント棒や造作、合板、梱包用材など、木材利用上重要な樹種である。

4) ワサビノキ *Moringa pterygosperma* Gaertn. moca 茂梨

樹高約7mに達する落葉高木で、葉は3回羽状複葉、幼果、幼葉は辛味があって食用となり、根はワサビ



写真2 *Moringa pterygosperma* Gaertn. ワサビノキ (日本新薬山科植物研究所)

の代用、樹皮繊維でロープを作る。材は青色染料となる。西部ヒマラヤに自生し、インド全域、熱帯各地に栽培され、和名のごとく horse radish tree と呼ばれている。

5) ロカイ属 *Aloe* spp., *Vašika* 蘆薈

ユリ科の植物で、草本状から多肉性まで多種類あり、この葉液を濃縮したものが漢方薬ロカイで苦味があり、健胃、緩下剤あるいは皮膚病などの生薬。

6) コーシャタカ *Košataka* 高奢得枳樹

この植物については

Trichosanthes dioica Roxb.

Luffa acutangula Roxb.

の2説がある。前者はウリ科カラスウリ属で、インドの北部パンジャブからアッサム、ベンガル東部までの平野部に普通にみられる。この葉が薬用であるかどうかは手許の文献では不明であるが、同属の *T. kirilowii* (シナカラスウリ) や *T. japonica* Regel (キカラスウリ) の根は解熱、止渴の漢方薬カロロン(枯萋根)、種子は消炎、鎮咳の漢方薬カロニン(枯萋仁)である。

後者は同じウリ科のトカドヘチマでインド原産、インドの西北部から東部ベンガル平野、セイロン、東南アジアその他の温帯地区に広く分布し、果実の断面が十角形をしているのでこの名がある。幼果は食用とな

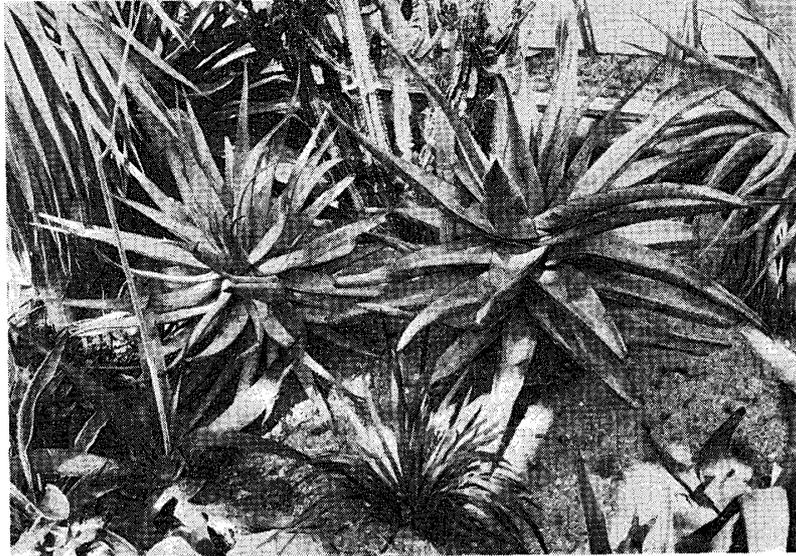


写真3 *Aloe* sp. アロエ属 (京都植物園)

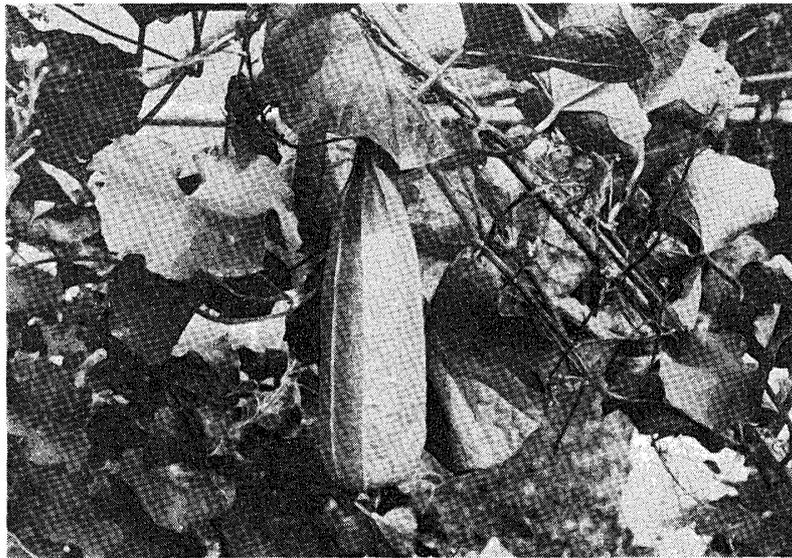


写真4 *Luffa acutangula* Roxb. トカドヘチマ (日本新薬山科植物研究所)

りインドから東南アジアでは主要な野菜源の1つである。

7) 栴檀 *Santalum album* L., Candana と伊蘭 *Ricinus communis* L., Eraṇḍa, トウゴマ

栴檀 (ビャクダン) は蓮華 (ハス *Nelumbo* spp. またはスイレン *Nymphaea* spp.) や沈水 (ジンコウ *Aquilaria Agallocha*) およびその他の香花, 抹香と共に, 心身を清浄にして煩惱を払い, 悟りへの道をたすける香木であるが, 肉体的な病苦をなおす薬香としてもよく用いられている。

弥沙塞部和醜五分律卷20によると, 釈迦が王舎城にあって痢病に苦しんだ時, 医師ジイワカは3本の蓮華を薫じて

「どうぞこの香をかいで下さい。1華をかげば10行(10回)下り, 3華をかげば30行下って, 病はなおりましょう」

釈迦が2華をかぐと20行下り, 残りの1華をかぐと9行でやみ, 最後の1行がおこらない。しばらくして

ジイワカがやってきて様子をきいた。

「いかがでしたか」

「3華をかいたが、もう1行だけ残っている」

「それではお湯をのまれたらよろしいでしょう」

釈迦がお湯をのむと最後の現象がおこって病はなおったが、ジイワカは「須らく補養せらるべし」と、重湯に梅檀香抹を加えて釈迦にすすめ駄目押をした。梅檀に薬効はあるが整腸にきくかどうか定かではない。しかし何というのんびりしたよい話ではありませんか。



写真5 *Ricinus communis* L. トウゴマ (京都植物園)

伊蘭については有名な伊羅鉢龍王の伝説がある。彼は遠い昔迦葉仏の頃、伊蘭樹の下で冥想修行していたが、ある日茎葉紫色の伊蘭をさして迦葉仏にたずねた。

「もしこの葉を破ればいかなる罪をえましょうや」

「その因縁により最も苦しい地獄におちるであろう」

彼は仏の言葉を信ぜず、戒を破り伊蘭の樹葉をおったために龍身となり、百千万才を経てようやく釈迦に会うことができた。

「世尊よ。私は龍身をえてすでに百千万才を耐えてきましたが、何時この龍身から脱することができるのでしょうか」

「弥勒菩薩この世に出現する時、お前は龍身を脱することができるであろう」

という訳で、彼は今なお龍身のまま、弥勒菩薩のこの世への出現を待ち続けている(弥沙塞部和醯五分律卷15, 四分律卷1, 根本説一切有部毘奈耶雜事卷5)。

伊蘭はしばしば臭木として香木の梅檀と対比されるが

「解脱をうるに種族的な差別はない。あたかも伊蘭、梅檀ともによく光と熱を出し、燃ゆるに差別なきが

ごとし」と平等な取扱いをうけている場合もある。

この木はアフリカ東北部原産といわれ、かなり古い時代にエジプトからインドにわたり、さらにマレーシアに分布している。日本とちがい熱帯地方では樹高約5mに達する常緑の灌木または喬木となる。茎は紫色を呈し、その種子は紀元前4000年頃のエジプトの古墳から発見されており、その頃すでに利用されていたものと推定されている。種子油が緩下剤ヒマシ油で、医薬の外、工業、化粧品などに広く利用されている。

伊蘭をクマツヅラ科の *Clerodendron phlomoides* L. (第3報参照) あるいはガマ科の *Typha* sp. (ガマ属) とする説もあるが、茎葉紫色に重きをおけばトウゴマが最も妥当であるが、日本産のトウゴマの葉にはとりたてていう程の異臭はない。

8) 黄柏

中国語黄柏には

Berberis aristata DC.

Phellodendron amurense Rupr. (キハダ)

などが考えられる。前者はメギ科メギ属でヒマラヤ原産、その温帯部からセイロンまで分布している常緑灌木。この木の樹皮その他の部分に薬効があるかどうか不明であるが、一般にメギ属の樹皮の煎液は眼病にきくとわれている。

後者はミカン科キハダ属の落葉喬木で、樹高約25m、樹幹直径約1mに達する。葉は長楕円鋭尖の小葉数枚からなる奇数羽状複葉で、剥皮直後の内皮は鮮黄色を呈しているのでこの名がある。苦く、健胃、利尿の有名な漢方薬である。家庭薬ダラニスケはこのエキスを主剤としている。数年来合成薬品キノホルムがとって代り、スモン病などで問題を起したのは御承知の通りである。樹皮は黄色染料としても利用される。材質はやや軽軟であるが心材は淡褐色で木理が美しく、造作、家具その他具器用材として喜ばれる。中国原産で

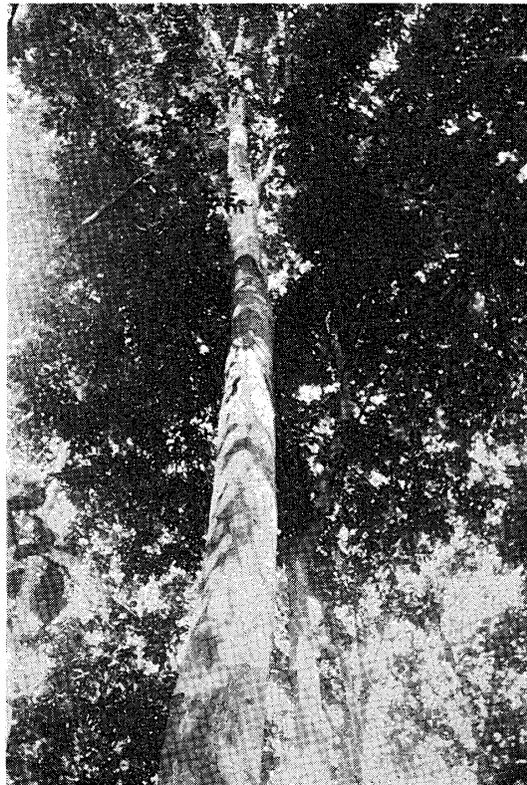


写真6 *Phellodendron amurense* Rupr. キハダ (京大理学部植物園)

朝鮮, 日本に分布しているがインドにはない。葉, 果実がニガキ (第3報) と非常によく似ており, ニガキの樹皮にも薬効があるので, あるいはこれと混同されたのかもしれない。

9) セイタカミロバラン *Terminalia belerica* Roxb. Vibhitaka 毘醯勒迦樹

インド全域の平野や岡に自生し, セイロン, マラッカからマラヤに分布する。樹高約25m, 葉は頂生で寒期に落葉する。花には不快臭があるが, 果実は薬用 (麻醉用), 黒色染料の原料となり, 黒い核果はヴェーダー時代には賭博に用い, 床の上にばらまいた実を掴みとってそれが4で割りきれるかどうかで勝負をきめていたという。リグヴェーダーには賭博に心を奪われ, この木を礼讃する次の詩がある (辻直四郎, インド文明の曙 岩波新書)

風にふかれてゆらゆらと
高き木になるヴィ ビータカ
賭博に心躍るとき
わが心もうきうきと
ムージャヴァットの山に生う
ソーマの酒のほろよいに
さも似て心をときめかす
いとしきものはヴィ ビータカ

日本でバクチノキといえはバラ科の *Prunus Zippeliana* Miq. である。樹皮は黄八丈の黄色染料の原料として有名であるが, 急に剝落するので, 身ぐるみはがれることに引かれてこの名がついたといわれている。ヴィ ビータカには詩があるが, おそらく *Prunus Zippeliana* にもよい詩があり謡 (うた) があるだろう。なお, 上の詩にうたわれているソーマ酒はヴェーダー祭典の最も重要な神酒 (須陀 Sutá) で, その原料植物は明らかでないが多分

Sarcostemma brevistigma W. A.

または *Sarcostemma intemedium* D. DC.

であろうと推定されている。ガガイモ科の植物で, 前者は多肉性の茎の蔓性灌木, 茎をしぼると黄褐色の芳香ある液がとれる。アフリカ原産でインド, マラヤでは薬木として栽培されている。後者はエチオピアから南西アフリカに分布し, インドではデカン高原に多い。多節円筒形の茎の灌木で, いわゆる milky sap を含んでいる。

さてセイタカミロバランの材は気乾比重0.6~0.7, やや黄色をおび, 加工性はよいが耐朽性が低い。最近合板原木として輸入が増加しているターミナリヤ属の中に, 比較的比重の低いこの材がかなり混在しているものと推察される。

仏典に登場するこの木の果実毘醯勒果は, 阿摩勒果 (アンマロク), 訶梨勒果 (ミロバラン) とならんで, とくに風邪にきく3大果葉の1つであるが, 釈迦がコーサラ国を遊行中弟子のシャーリプトラが風患にかかった際, 風薬蘇毘羅 (suvira) を与え, その作り方を教えている。すなわち阿摩勒果, 訶梨勒果, 毘醯勒果の煎汁に7穀および一切の果, 葉, 魚, 肉, 蜜, 砂糖をいれて和合し, 3, 4年密封して蜜色となったものを濾過して服用すると特効があるという (摩訶僧祇律卷29, 毘尼母經卷3)。この果実はまた染料としてよく用いられるが, これについては後述する。

食 事

(1) 果 食

食は本来心身増益のかたとするものを意味するが, 肉体を養う食については, 仏典によっていろいろの種類があげられている。このうち律部に最もよく登場するものに果食がある。すなわち

菴羅果 (マンゴー *Mangifera indica*)

鎮頭伽果（インドガキ *Diospyros embryopteris*）

多羅果（オーギヤン *Borassus flabellifer*）

那梨耆羅果（ココヤシ *Cocos nucifera*）

紺瓠子（ラクーチャパン *Artocarpus Lakoocha*）

などがそうで、多羅果、那梨耆羅果、紺瓠子は非時食するをえずとしているものもある。これらの樹木、果実についてはすでに前報で説明した。

昔、波羅奈国（現在のベナレス附近）に住む車波加という居士の妻が妊娠して、マンゴーが食べたくてたまらなく、ついに夫にもしマンゴーが食べられないと死ぬかもしれぬとうったえた。居士は王宮の樹園のマンゴーが午後になると熟するのを思い、夜半ひそかに王のマンゴー園にしのびこんだが、まだとり終らないうちに夜があけてしまった。逃げることができなくなった彼が、そのまま樹上にかくれているとやがて王とバラモンがやってきて、王は上座に、バラモンは下座にすわって、マンゴーを食べる前に、先ず一席の法話をはじめた。樹上の居士はこの法話をきいているうちにつくづくと思う。

「私は今マンゴーを盗もうとしたが、これは死に値することだ。私は妻のためにマンゴーを盗もうとし、王は橋慢のために師たるバラモンの上座に位し、バラモンは利のために自ら卑下し、しかも王のために法を説く。3人共に法をしらず、しかし私は今やこの無法から脱することができた」

彼はマンゴーの木から降りていう。

「二人法を知らず。二人法を見ず。教うる者法によらず、調（な）らうもの法を解せず。飲食のための故に、名利を以てのための故に」

これは衆学戒（軽犯罪に関する戒律であるが、それだけに守りにくく犯しやすい戒）の一部であるが、米麦のために節を屈せず、權威に依りて礼を失わざることは、凡人にはなかなかむつかしいことである。

筆者の子供の頃は「3尺下って師の影を踏まず」と教えられたものである。これも少し行きすぎかもしれぬが、現代では逆の方へ行きすぎて、意見が合わず氣にいらないと師の胸ぐらをつかんでこずきまわすことぐらいは珍らしくなくなってきている。

(2) 葷

「不許葷酒入山門」という言葉がある。葷はネギ、ニラ、ニンニクなど臭気の強い野菜をさす。上戸はこれを「葷を許さず酒山門にいる」と読んで悦にしているが、釈迦がコーラサ国の主都舎衛城に滞在していた頃、たまたま1比丘が蒜（ニンニク）を食べていたためその臭気が気になって、切角の釈迦の説法も身にはいらず、そのため預流果（三界の見惑を断じた段階）をうることができなかった。

「蒜、葱（ネギ）、韭（ニラ）類を食すべからず。食わんに越法罪なり」

しかし、ある時1比丘が病気にかかり、医者が蒜を服用するようすすめたが、この戒の故に蒜を食べなかった。そこで次の例外がもうけられた。

「ただし医にしてこの薬あるのみ。余に蓋（供）するものあらじといわんにはこれを服せんこと無犯なり」

比丘はこれをきいて早速蒜を食べ、衆中に交わって大いに教化活動をしたため、大衆に嫌悪されたので、再び次の戒が作られた。

「諸の病比丘にしてもし蒜を食わんには、正に寺側の辺房に住すべく、衆に入るを禁ず。服し了れる時、7日此に住せよ。葱を服せんには3日、韭を服せんには1日（外出禁止）。後洗浴し並に衣を洗うべく、薫香して氣（臭気）なからんに正に寺に入るべし。これを依行せざらんには越法罪をえん」（根本説一切有部毘奈耶雜事卷6）。

鉢

意外なことに、仏教では食物を盛る鉢に木鉢を使うことを禁じている。

「木鉢をもつことを許さず、これ外道の法なり」（四分律卷52）。

釈迦が王舎城に滞在していたころ、ビンピサーラ王の宮殿の柱に立派なシンサパー（シッソノキ *Dalbergia Sissoo*）が用いられていた。比丘たちはこれを見て「これはもったいない事だ。この立派な木で鉢を作ればよかったのになあ」。王はこれをきいて早速柱をとりかえ、シッソノキで沢山の鉢を作り比丘たちに与えたが、上の戒のために比丘たちはこれを辞退したという。

なぜ木鉢がいけないのか。摩訶僧祇律卷29や5分律卷25などによると

「木鉢は垢膩（あかや汗あぶらでよごれること）をうくる故に、また外道の印なるが故にこれを用いるを許さず。瓦鉢または鉄鉢を用うべし。鉄鉢を用うる時は正に阿摩勒核（アンマロク）、佉陀羅核（アセンヤクノキ）、竹根を以て薫ずべし」

としている。木材素地の触感覚は抜群であるが、そのまま食器などに常用するにはやはり問題がある。釈迦は諸国を遊行中蘇摩国（？）の一箇所を指し「この土をとって鉢を作り、尸舎婆木（シッソノキ）、阿摩勒木、佉陀羅木および棗木（ナツメノキ）を四方においてこれを焼け。……」と詳しく陶鉢の作り方を教え、これを比丘たちに与えている。

楊 枝

第3報で述べたように、歯木は1種の楊枝で、護摩に先立って心身を清め煩惱をかみくだくことを意味し、健全な阿説他（インドボダイジュ）や優曇鉢羅（ウドンゲノキ）をよしとするが、われわれが日常食後に使う浄歯専門の楊枝には古くからハコヤナギ属 *Populus* spp. がよく使われている。

摩訶僧祇律卷34によると、悪行比丘たちはいつも長さ不揃いの歯木をかんで行儀が悪く、世人に嫌われたため、1時釈迦は比丘達に楊枝をかむことを禁じた。しかし、そのため比丘たちの口臭がきつく、かえって弊害を生じたので、釈迦は歯木の寸法を長くて16指（1指は約3cm）と規定した。さしずめ木枯し紋次郎ばかりだが、こう長くてはもはやわれわれの楊枝の概念からはみ出してしまふ。薩婆多部毘尼摩得勒伽などでは上は12指、下は8（6）指、その間を中と名付け、まず深豆（洗剤）土屑を以て手を浄洗し、次に歯木を洗う。噛み終れば水にて洗いしかる後に捨つ（根本薩婆多部律撰卷11）など歯木を使う作法についても細かく規定している。

「楊枝をかむに5種の功德あり。1に口気香潔、2に咽喉清浄、3に痰癢、宿食（前日のたべかす）を除き、4に食を思い、5に目病なく眼目明浄なり。楊枝をかまざるに5種の過患あり、……」（毘尼母經卷5）

楊枝と眼病にどのような関係があるのか、筆者にはわからない。

善見律毘婆沙卷1に

「阿育王の時、雪山（ヒマラヤ山）の鬼神日楊枝木の羅多と名づくるを献ず。柔軟香美なり」といい、根本説一切有部毘奈耶卷35や同苾芻尼毘奈耶には

「波羅舎の条（枝）を以て歯を浄めん」

という偈があるから、これらの樹種も歯木に用いられたのであろう。

羅多は *Nāgalāta* すなわち *Mesua ferrea* L.（セイロンテツボク）で花に芳香はあるが、材は名の如く非常に堅く、柔軟とはいえない。また波羅舎 *Palāṣa* は *Butea frondosa* Roxb.（ハナモツヤクノキ）で材は白っぽく比較的やわらかい。

10) ハコヤナギ属 *Populus* spp.

食事に使う浄歯専門の楊枝には古くから楊樹すなわち

ドロノキ *Populus Maximowiczii* A. H.

ヤマラナシ *P. Sieboldii* Miq.

などを用いている。何れもヤナギ科で前者は日本中、北部、朝鮮、中国北部、シベリヤに分布し、生育環境がよければ樹高30m、樹幹直径1.5mの大木になる。後者は主に日本の北部に産し、樹高約15mに達する落葉樹である。共に材質が軟かく、気乾比重0.45位、色調が白っぽいので楊枝をはじめマッチの軸木、キャン

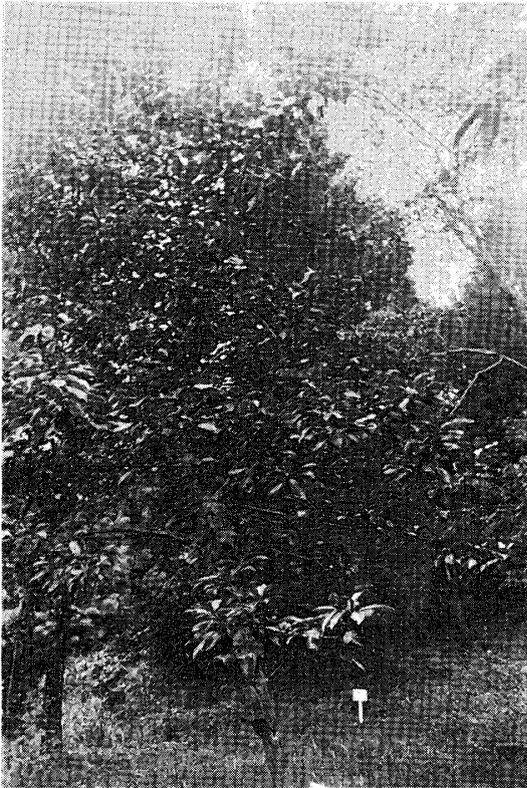


写真7 *Populus Maximowiczii* A. H.
ドロノキ (京大演習林上賀茂試験地)

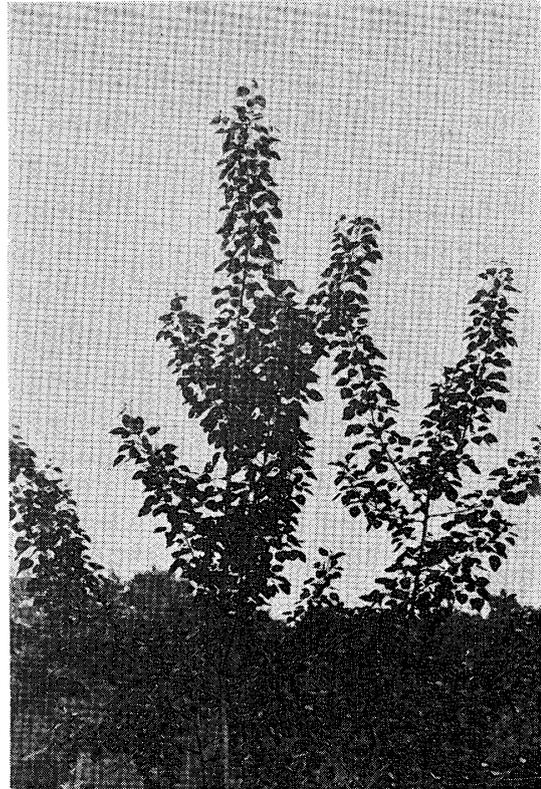


写真8 *Populus Sieboldii* Miq.
ヤマナラシ (同前)

ディスティック、製紙パルプ用などの重要樹種で、かつてキャンディスティックなどで貴重な外貨をかせいでいたが近年はやや停滞している。

インドには

アメリカヤマナラシ *P. nigra* L.

キンドロノキ *P. alba* L.

などがヒマラヤ地区の標高1,500~3,000m附近にあるようだが蓄積は少ない。

熱帯、亜熱帯地方ではポプラ属、ヤナギ属の木を歯痛のまじないにする所もある。またヤマナラシやシダレヤナギの花は古くから敷具の詰物や綿代用にもちいている。

第2報でのべた都羅綿には木綿、蔓綿、草綿の3種があり

「比丘にして都羅綿を臥具に在るは王、大臣の如し。不可なり」(十誦律卷19)

とする一方

「柳華(シダレヤナギ)、白楊華(ヤマナラシ)、満梨華(蒲柳ネコヤナギ?)の都羅を座具、寝具に在ること波逸提なり」(五分律、薩婆多論、根本薩婆多部律撰卷13など)

ともしているが、これは虫がわきやすいためである。

3 廃棄物

(1) 生活廃棄物

いかに修行する比丘たちとはいえ、教団を作り、大きな団体生活をしていると、日常いろいろと面倒なことも出がちである。

摩訶僧祇律卷30によると、釈迦が毘舍離(釈迦在世当時のインド十六大国の1つ)の大林精舎に滞在して

いた頃、僧院内で炊事をしていたため、生活污水が街に流れ、人人の非難をうけた。

「今日より内に浄厨（台所）を作し、潘汁（米のとぎ汁）をして外に流れしむかれ。浄厨を作さんに東方、北方に作すべからず。正に南方、西方に作すべきなり。これを犯さば越毘尼罪（戒律に反する一般犯罪）なり」。

またビンビサーラ王がマンゴー園を比丘たちに開放した時、彼等は食べられるだけ食べつくし、中には果実を地上に棄て、あるいはかごに入れて持帰り、王をして

「沙門釈子厭足（満足）をしらず、求欲する所多し。自ら正法を知るといふも何の正法かあらん。施すものは厭うなしといえども受くるものは正に足るを知るべし」

となげかしめ、そのため釈迦は比丘たちに一時マンゴーを食べることを禁じた（四分律卷52, 五分律卷25, 根本説一切有部毘奈耶雜事卷1）。

さらにまた食物や不浄物で座具を汚すと、そのままこれを棄てて立去る比丘も出てくる。

「もし残食にて汚さんに、正に水を以て洗うべく、もし油にて汚さんには正に澡豆（洗剤）を用うべく、もし不浄にて汚さんには土、牛糞を以てこれを揩洗（こすり洗う）して、まさに持去るべし」（根本説一切有部毘奈耶卷28）。

人類は原始以来随分進歩した筈であるが、これをみると現代の日本人の行楽エチケットはこの2000年間古代人のそれから一歩も進歩していないようである。

あき缶、あき瓶、煙草のすいがら正に持帰るべしである。

(2) 人体廃棄物

いわゆる紙とよぶものに文字が書かれた最も古いものはパピルス（papyrus, カヤツリグサ科）から作られたもので、エジプト第五王朝（前2500年頃）の遺物の中に現存しているそうである。古代インドの仏教経文の最も古いものは（貝）多羅葉とよばれ、多羅（オーギヤシ *Borassus flabelifer*）の葉で作った紙に書かれているが、これは中国を経て日本にも伝えられている。植物繊維を原料にした紙らしい紙は2世紀のはじめ頃中国で作られたといわれているが、現在のような木材繊維を原料にしたいわゆる洋紙のマスプロは19世紀の中頃からはじまっている。日本に製紙技術が伝えられたのは推古天皇の頃（610年頃）といわれ、ここから日本独特の和紙の技術が生れた。

釈迦在世当時のインドではおそらく紙らしい紙は非常に貴重で、五分律卷29によると当時の比丘たちは竹



写真9 *Papyrus* sp. パピルス（日本新薬山科植物研究所）

や蘆の葉を廁草とよび、トイレットペーパーの代用に使っていたようである（筆者の子供の頃でも貧しい農家などではまだ藁を使っていたところがあったように記憶している）。御承知のようにこれらの葉縁は意外に鋭利だから比丘たちはよく切傷をつけ、衣服を汚したため、釈迦は一時「廁草を用いることを許さず」とその使用を禁止した。しかし、そうなればまたそのために衣服を汚すことになるので結局

「利物を用いて廁草をなすべからず。削りて楞（かど）を去るべし。漆樹をのぞける余の木はことごとく用うるを許す」

という戒ができた。

どういう訳か律ではウルシノキは忌樹とされ、たとえば諸比丘がひそかに蓋（日覆、日傘）を作ることの可否をうかがうと、釈迦はこれを許し、木で頭子（ろくろ）を作ること、ただしウルシノキを用いてはいけないとし、漚鼻筒（鼻を洗ううつわ）や鉢支（鉢の底をささえる器）にもウルシノキを除く余の木、竹、銅、鉄、牙、角などを用いるよう規定している。インドのような暑い国では、ウルシにかぶれると特に憂鬱で耐え難いので、皮膚にふれやすいものに使うことを警戒したのだろう。台湾では山のウルシノキは全部さり倒している。

それはともかく、上のような戒が出されると、今度は諸比丘、廁草（もはや草ではないが）を作るのに長短細太、使ったあとも所かまわず投棄した。中国でも乾屎凵と称するナイフ型のヘラを使っていたようであるが、いずれにしてもうまく使うには特殊技術を要するであろう。という訳で再び次の指令が与えられた。

「正に中をえさしむべし。また器を作りて盛るを許す。もし満つれば、見るものこれを坑中にいれもしくは火焼せよ」

こうなると過保護もいい所で、お釈迦様も現代の教育ママ以上に細かい神経を使われたようである。

ある日、仏教徒の長者がバラモンと一緒に祇園精舎を訪れ、あちらこちらを見学していると1本の果樹の下に廃棄物があった。バラモンはこれを見ると得たりとばかり

「果樹の下で用を達するとは、仏教徒はどれも不潔ですね」

「いやあれは白衣（俗人）の仕業だろう」

この問答の最中に、頭から衣類をかぶった老比丘がやってきて樹下で用を達した。

「あなたは白衣だとおっしゃったが、見なさいやはり比丘ですよ」

この事が仏に伝えられ

「苾芻正に諸樹林下において大小便すべからず、もしことさらに犯さんに越法罪をえん」

しかし大森林地帯を遊行する時にはこれでは困るので

「道行して大林処に至らんに意にまかせて便転（大小便）せよ」

悪行比丘鄒波難陀が大便で薬園を汚した。

「苾芻生草上に大小便するを得ざれ」

かくして無草地帯は糞汚狼籍となったので、釈迦はついに廁を作るよう諸比丘に指示した。

「2種あり。1は直舎、2は傍出なり。直舎は方丈屋の如く廁その中にあり。傍出は房後の担架木（軒桁）より傍出して、廻らすに板障を以てし、廁に入らんとする時は弾指、声咳すべく木履をそなえ……」と詳しく寺内便利法が作られた（根本説一切有部毘奈耶雜事卷20）。

11) ウルシ属 *Rhus* spp. 漆樹

戒律にきらわれているウルシ属中の代表はウルシノキ *R. vernicifera* DC. で、中国またはチベットが原産地とみられ日本からインドのヒマラヤ温帯地まで分布している。

奇数羽状複葉の小喬木で、国によっては若葉を食用にする。材は比較的軽く、辺材は白っぽい心材はきれいな黄褐色を呈し、家具、寄木細工に適するが、弾力があるので建具、下駄材にも喜ばれる。漆液は6月上旬から9月にかけて樹皮、韌皮に切目をいれて採取し、マツヤニやアマニ油などを加えて作る。漆液の採



写真10 *Rhus tricocarps* Miq. ヤマウルシ (京大演習林上賀茂試験地)



写真11 *Rhus succedanea* L. ハゼノキ (京大演習林上賀茂試験地)

取は日本、中国ではもっぱらウルシノキであるが、インドからベトナムにかけてはハゼノキ *R. succedanea* L. が多いといわれる。塗料としてのウルシの利用は絹と同様中国にはじまり（一説にはインドともいう）、古く縄文時代に日本に伝えられた大陸の技術で、日本で大きく発展した、いわゆる照葉樹文化の所産の1つであるが、中国では湖南省の馬王堆漢墓（紀元前200～100年）から多くの漆器や漆塗り木箱が出土したことを聞き、また大阪で開催された中国展（1974）において、目のあたりスケールの大きな漆工芸品を見るにつけて、今更ながら、その歴史、技術の偉大さに敬服させられる。

4 洗 剤

四分律や十誦律に登場する澡豆は、本来各種の豆の粉末に薬品を加えて作った昔の洗剤であるが、古くからサイカチの莢果を洗濯、入浴に使っていたことから、サイカチを意味するようにもなった。

ある日、1人の女性が川で水浴した後、岸に上って髪を梳いていた。丁度この時吐羅難陀比丘尼も澡豆を使って体を洗っていたが、女が髪を梳いているのを見るとむらむらと心に嫉妬をおこした。

「馬鹿にしてるわ。私だって昔は長いふさふさした髪をもっていたんだわ。何にもことさら見せつけなくたってよいぢやないの。こらしめてやろう」

と、アンマロクの果実の粉を、女の梳いたばかりの髪にふりかけた。

「諸尼、正に雑抹等をもって他の浄髪を撲つべからず。作さんには越法罪をえん」（根本説一切有部毘奈耶薬事卷34）。

ある比丘が粗い澡豆で鉢を洗ったため鉢が傷だらけになった。おそらく莢の中の種子もろとも乱暴につき砕いて使用したのであろう。

「細かく砕き篩ひたる後用いよ」（毘尼母経卷4）。

12) トウサイカチ *Gleditsia sinensis* Lam.

サイカチ属のうちインド、中国に生育しているものを探すとトウサイカチがある。樹高約15mに達する落葉喬木で枝や樹幹に刺が多いのが特長である。中国中部原産で若葉は食用になる。この莢果を皂莢といい去痰、排膿の生薬、また小枝が退化して刺となったものは皂角刺といい解毒用生薬である。



写真12 *Gleditsia japonica* Miq. サイカチ（京大理学部植物園）

5 染衣・內衣

現代の僧侶の衣は金襴緞子、花嫁衣裳そのけの豪華なものであるが、本来は華美な原色をさげ主として青、黒、木蘭（黄色系）の壊色（袈裟 kaṣāyā 混色のこと）を用いることが規定され、この事から法衣を袈

袈とよび、さらに転じて現在の儀式装飾的な袈裟の意味となった。染色にはいろいろの樹皮、果実などが用いられる。

「もし比丘新衣をえんに、正に黒、青、木蘭の3種の壞色をなさずして受用せんには波逸提なり。青は銅青すなわち藍色、黒は訶梨勒果（ミロバラン）、毘醯勒果（セイタカミロバラン）、阿摩勒果（アンマロク）を鉄と合して作る。木蘭は上記3種の果などを生鉄上に摩して作淨（定められたる作法にしたがう）して作るべし」（摩訶僧祇律卷18, 根本薩婆多部律撰卷12）。

根本説一切有部毘奈耶雜事卷15によると1比丘が湿った染木を煮たが色がよく出ない。

「曬（暴）乾してしかる後に煮用せよ」

日にさらし乾かしたがやはりよくない。

「日中に曬暴すべからず」

陰干にすると黴がはえた。

「烈日に非ず、極陰に非ず。隨時曬暴せよ」

染木と衣を一緒に煮て衣を破る比丘がでた。

「別に煮汁を煎るべし」

煮汁を一度で使いすてる比丘がでた。

「三度煮んに正に棄つべし」

新しい染汁で古い衣を染める比丘や新しい衣を古い染汁に入れる比丘がでた。

「新衣は新汁に、旧衣は旧汁に投ぜよ」

等等。お釈迦さまもなかなか多忙である。

比丘が欽婆羅（羊毛）衣を染めたいと願った。

「尸舎婆樹（シッソノキ）、佉他羅樹（アセンヤクノキ）、胡桃樹（クルミノキ）を用いて染むるを許す。ただし純黒の衣を作るべからず」（弥沙塞部和醯五分律卷27）

衣のつぎには内衣（下着）について少しふれよう。

世界の女性のスカートはマキシからミニ、ミニからマキシへと時代の流れとデザイナーの涙ぐましい努力によって、猫の目の如く変るが、すでに遠く西暦紀元前後において、比丘たちさえも内衣のデザインに苦心していた事を思えば、これまた当然のことであろう。

「六群（悪行）比丘、あるいは低く、あるいは高く内衣を著し、あるいは石榴花（ザクロ）の如く、多羅樹葉（オーギヤシ）の如し」（摩訶僧祇律卷20, 解脱戒經）

とあるから、下着のマキシ、ミニはもちろんザクロの花のようにフレアーをつけ、オーギヤシの葉のように鬘をつけていたのであろう。これをそのままに放置しておく、たちまちのうちに流行して何が飛出すかわからない。直ちに次の戒律が発令された。

- (1) 内衣は長すぎても短かすぎてもいけない。踝の上下1搦手（てのひらの長さ）以内におさめること
- (2) ただし遠出の場合には、上は膝下から下は踝の上2搦手までとする
- (3) 参差（ジグザグ）せず、蛇頭の如く（反りをつける？）しないこと
- (4) 多羅葉の如く鬘をつけないこと

（薩婆多論卷9, 根本薩婆多部律撰卷13, 根本説一切有部毘奈耶卷20, 根本説一切有部毘奈耶卷45, 五分律卷10）

13) クルミ属 *Juglans* Spp. 胡桃

日本でクルミ属といえば（オニ）クルミが代表的であろう。葉は奇数羽状複葉、生育条件がよければ樹高30m、樹幹直径約1.0mの大木になる。樹皮または果皮は黒色染料、果実は食用になるが、本来果樹としては適当ではない。材の比重は0.53、心材は淡褐色、木理がきれいで狂が少く室内造作、家具、諸器具用に愛

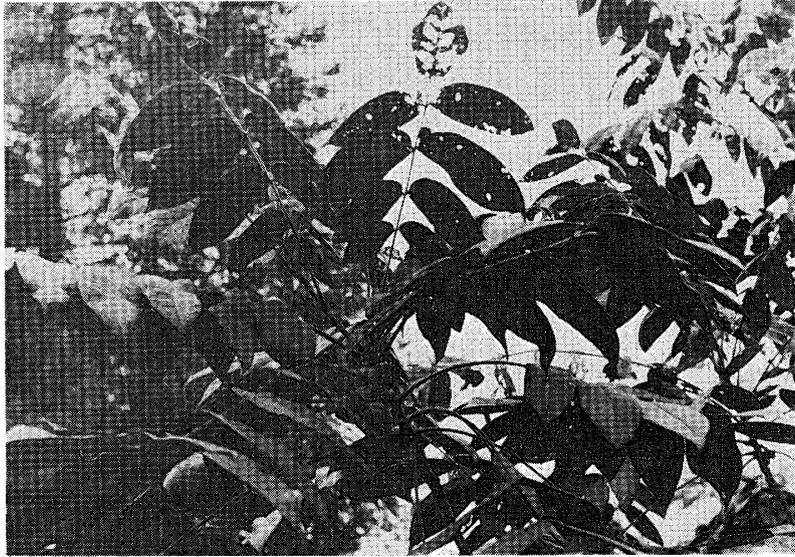


写真13 *Juglans Sieboldiana* Max. オニグルミ (京大演習林上賀茂試験地)

用される。かつて高級棺材としても利用されていたようである。

インドの温帯ヒマラヤ、チベット、カシミールからビルマにかけては
ペルシャクルミ *J. regia* L.

が自生または栽培され、全世界に広く分布している。この中でも果実を目的とした北米カリフォルニア州のクルミ栽培は世界的に有名であるが、Wood Technologist にはこの核の粉末 walnut shell flour が接着剤の extender として馴染が深い。材の比重は0.6~0.7、比重の割に強く、割れや狂が少ないので、かつて銃床用材として一世を風靡した。色調が灰色から灰褐色で、よく縞模様があらわれるので、高級家具、彫刻用にも好まれている。

6 植林・自然環境の保全・斫伐禁

舎衛城の近くにマンゴーの植林の上手な1人のバラモンがいた。彼は釈迦が超能力をもち、過去、現在、未来のあらゆる質問に答えるとき、その力をためそうとした。

「菩薩よ。マンゴーの木が丈夫でよく果実ができるように過密過疎なく育てるにはどうすればよいか」
「五肘弓量を以て七弓に一樹を植えよ」

1肘を約54cmとすれば、5肘すなわち1弓は約2.7mであるから、植樹間隔は約18.9mとなる。現在の定植間隔は少くとも10mといわれているからまずまずという所であろう。

「よいかなゴータマ菩薩。よく植樹の法を知る。うわさにたがわず彼は何でもよく知っている」
バラモンが感謝して立去ると、釈迦は比丘たちにいう

「かのバラモン今大いに失う所あり。正に問うべきものを問わず、正に問うべからざるものを問えり。もし彼苦集の義（四諦すなわちこの世は苦であり、苦の原因は煩惱であり、煩惱を消滅した状態が理想境であり、これを実現するのが8つの正しい実践—八正道—にあるという4つの真理）を問はば道跡（道筋）をうべかりしに」（摩訶僧祇律卷8）。

バラモンは正に釈迦をためそうとして、逆にためされた訳である。

王舎城の東、毘陀山(?)には樹木がなく、毎年ここで開かれる大法会には、大衆は暑さのために苦しめられた。そこで比丘たちは釈迦の許可をえて、ここに植樹をしたが、植えつばなしにして立去ったために全部枯れてしまった。次の年また人人は大法会に集まったが、前年同様暑さのために苦しめられた。

「木も人間と同様に小さい頃は養護しなければ駄目だ。そんな簡単な事がわからないのか」

大衆が比丘を非難したので、次の戒が生れたという。

「木を植えんに直ちにすてて他行すべからず。冬月捐せんをおそれんには正に草をもって覆うべし。夏暑には窓穴を通ずべし。野火には四辺に畳壘（未焼の瓦を積重ねる）して庶護すべし。……」と詳しく対策を指示した後

「花樹ならんには花あらわれんに行くにまかす。もし果樹ならば子（果実）をつけんに正に去るべし」
（根本説一切有部毘奈耶雜事卷17）

最近自然環境の保全がしきりに叫ばれている。この事自体は大変結構なことであるが、事によってはいささか行過ぎの感がないでもないと思うのは筆者1人のひが目であろうか。それはともかく、仏教戒律はすでに2000年前、自然環境を保全し、みだりに樹木、生草を損することを禁じている。すなわち

「5種の樹あり。斫伐することをえず」

この伐採禁止樹木は仏典によって必しも一致しないが、レギュラーとしては

1. 菩提樹（インドボダイジュ）
2. 閻浮樹（ジャンボラン）
3. 尼拘律樹（ベンガルボダイジュ）
4. 沙羅樹（サラノキ）
5. 鬼神樹（樹王の宿る樹木、神木）

などがあり、ゲストには

6. 路中の大樹
7. 尸陀林（第1報参照）

などがあげられている。レギュラーは何れも神聖樹、ゲストの路中の大樹には次のようないわれがある。

コーサンビ城（釈迦在世当時の16大都市の1つ）の近くの路傍に1本の大樹があって、旅人、馬車、象などがよくこの緑陰に休憩し、樹間には小鳥たちが群れ遊んでいた。たまたま尊者闍陀が国王からどれでも好きな木を切ってもよいという許可をえて、この大木を切倒して自分の大僧房を建てた。大衆から非難の声が起ったのは当然であろう。

「もし比丘、衆生の依住する樹木を破壊すれば波逸提なり」

この路中の大木は仏典により尼拘律樹（ベンガルボダイジュ）、阿説多（インドボダイジュ）あるいは沙羅樹（サラノキ）となっているが、これはもちろん神聖樹としてではなく、緑陰樹としての故であろう。

しかし、こうした中にも例外が作られ、止むを得ぬ仏塔、僧房の修理、火災、水害の場合には菩提樹を除く他の木は斫伐を許され、焼木、枯木、風倒木、流木などもこの限りに非ずである。

また、あえて神聖樹や路中の大樹のみではない

「それぞれ分にかない、限にしたがい、過ぎてとるべからず。湿润木を切るを許さず、正に枯れたるものをとるべし。僧房内の樹林にして観望よきは斫るを得ず。山林にして主の守護なきはきるも無罪なり」（摩訶僧祇律卷33）。

7 騒音

多羅（オーギヤツ）は葉、莖、華、果すてる所の無い貴重な樹木で、その葉で屋根をふき、むしろ、かごを作り、古代にはこの葉を乾かして紙のようにしたものを（貝）多羅葉といい、経文をきざんだが、この葉は楽器にも使われていたようである。

十誦律によると、昔馬宿、満宿という悪行比丘が、悪行比丘尼たちと一緒に連日連夜、口笛を吹き、銅鉢をたたき、多羅葉を弾じて騒いでいたので、釈迦はこれを禁じ、ついに退去を命じているが、どこかの国の夏の湖岸を彷彿たらしめ、たちまち2000年の歴史が現代に圧縮される。

ところで楽器といえば、インドには古くからビナ（vinā）というマンドリンに似た楽器がある。

かつて王舎城にスロナという大変な長者がいて、自分の足で地上を踏んだ事がないので足の裏にも頭髪のような毛が生えていたという。彼はある日釈迦の説法をきいて心に感じ思わず裸足で仏の前にゆき礼拝した。釈迦がこれを見て微笑した。釈迦が笑を浮べるのは非常に珍しい事なので弟子の1人がその理由をきくと、スロナがはじめて自分の足で地上を踏んだからであるという。

スロナは釈迦からいろいろの話をきいて、出家を決意した。彼は尸陀林で猛烈な修行をして足は傷つき血が流れて、鳥がこれをつつくほどであった。さて久しからずして彼はつくづく思う

「仏弟子中私ほど精進した者はいないだろう。しかもまだ、もろもろの苦惱を断つことができない。幸い家には財産もあるしやはり俗人にかえて功德善行でもしようか」

王舎城にあった釈迦は彼の心を知って尸陀林におもむく。

「スロナよ、お前は家にいた頃ビナをひいたことがあるか」

「はい上手にひけますよ」

「アレグロがよいかそれともアダージョがよいか」

「いえ、アレグロだけでもまたアダージョだけでもいけません。全体としてモデラートが必要です」

「仏法も正にその通りだ。大急、大緩いづれも駄目だ。精進して中道をとれば、間もなく苦を滅することができるであろう」

仏法の2字を学問あるいは人生の2字におきかえてもよく、教えられる言葉である。

さて話は横にそれたが、馬宿、満宿のなす騒音などはまだ序の口である。

釈迦が菩提樹下に吉祥草（クサ草 *Poa cynosuroides* Retz）を敷き瞑想にはいるや、魔王はこれを邪げようとして、あらゆる魔法をもって釈迦を襲うが効果がない。この上は最後の手段として騒音あるのみという訳で、3万6千俱胝（俱胝：1000万）の魔神を総動員してシュピレッヒコールをやる。ために釈迦は12由旬（由旬：約13km）のキャダンバ（*Anthocephalus cadamba*）の防音林を作り、シュピレッヒコールから耳を護ったそうであるから（根本説一切有部毘奈耶破僧事卷5）、古代から人間は騒音に最も弱かったようである。音響学的には密度の高い材料ほど庶音性能にすぐれているが、古代インド人が経験的にこの事を知って、硬質の葉をもつキャダンバを防音林に選んだとすれば驚くべき知恵といえよう。

騒音といえば、空港周辺に防音林を設けて騒音を防止しようとする最近の試みは、音源が立体的に移動するだけに、なかなかむっかしく、各国共まだ試行錯誤の段階で、地形はもちろん、防音林を構成する樹木の種類、高さ、林分密度、葉の種類、つき方、その密度などが複雑に影響することが予想されるが1つの結論としては、林内通過音の減衰は幅50mの常緑防音林で10~15 dB、幅100mで25~35 dBといわれている。また東海道新幹線の騒音を遮断して音響感覚的にまずまず不快ならざる程度にするには、幅200mの防音林が必要だという計算になるそうである。由旬については諸説があるが、かりに13.5 km とすると12由旬は約150 km となるから、この魔神たちの騒音がいかにげしいものであったか想像できよう。

しかし、魔神たちのなすシュピレッヒコールは本来自己の内から発する騒音である。自己の内なる騒音を遮断することは外なる騒音を遮断することよりはるかに困難であることはいうまでもない。 （未完）

参 考 文 献

- 市村真一，東南アジアを考える，創文社
中尾佐助，栽培植物と農耕の源起，岩波新書。
辻直四郎，インド文明の曙，岩波新書。
その他，第1，2報に同じ。

樹 木 学 名	科	属	種	頁
<i>Aconitum carmichaeli</i> D.	キンポウゲ	トリカブト	トリカブト	4
<i>Acorus calamus</i> L.	サトイモ	ショウブ	ショウブ	4
<i>Aegle Marmelos</i> Corr.	ミカシ	ゲッキツ	ベルノキ	3
<i>Aloe</i> spp.	ユリ	ロカイ	—	4, 8
<i>Anthocephalus cadamba</i> Miq.	アカネ	アンソセファルス	キャダンバ	2, 23
<i>Aquilaria Agallocha</i> Roxb.	ジンチョウゲ	ジンコウ	ジンコウ	4, 9
<i>Artocarpus Lakoocha</i> Roxb.	クワ	パンノキ	ラクーチャパン	13
<i>Berberis aristata</i> DC	メギ	メギ	—	11
<i>Borassus flabellifer</i> L.	ヤシ	オーギヤシ	オーギヤシ	3
<i>Butea frondosa</i> Roxb.	マメ	ブチア	ハナモツヤクノキ	13, 14, 16
<i>Clerodendron phlomoides</i> L.	クマツヅラ	クサギ	—	11
<i>Cocos nucifera</i> L.	ヤシ	(ココ)ヤシ	(ココ)ヤシ	4, 13
<i>Curcuma longa</i> L.	ショウガ	ウコン	ウコン	4
<i>Cyperus Rotundus</i> L.	カヤツリグサ	カヤツリグサ	カヤツリグサ	4
<i>Dalbergia Sissoo</i> Roxb.	マメ	ツルサイカチ	シッソノキ	14
<i>Diospyros embryopteris</i> Pers.	カキノキ	カキノキ	インドガキ	13
<i>Eleusine indica</i> Gaertn.	イネ		オイシバ	7
<i>Eleusine indica</i> Gaertn. var. <i>coracana</i> Makino.	イネ		シコクビエ	7
<i>Erianthuss Griffithii</i> Hook.	イネ	タカオススキ	—	6
<i>Eugenia Jambolana</i> Lam.	フトモモ	フトモモ	ジャンボラン	4
<i>Feronia elephantum</i> Correa.	ミカン	フェロニア	ナガエミカン	3
<i>Ficus bengalensis</i> L.	クワ	イチヂク	ベンガルボダイジュ	2
<i>Ficus glomerata</i> Roxb.	クワ	イチヂク	ウドンゲノキ	4
<i>Ficus religiosa</i> L.	クワ	イチヂク	インドボダイジュ	4
<i>Gleditsia sinensis</i> Lam.	マメ	サイカチ	トウサイカチ	19
<i>Grewia asiatica</i> L.W. & A.	シナノキ	ウオトリギ	インドウオトリギ	7
<i>Grewia tiliaefolia</i> V.	シナノキ	ウオトリギ	オーバウオトリギ	8
<i>Imperata cylindrica</i> Bed.	イネ	インペラータ	チガヤ	7
<i>Juglans regia</i> L.	クルミ	クルミ	ペルシャクルミ	21
<i>Juglans</i> spp.	クルミ	クルミ		20
<i>Luffa acutangula</i> Roxb.	ウリ	トカドヘチマ	トカドヘチマ	8
<i>Madhuca latifolia</i> M.	アカテツ	マドウカ	イリッペ	4
<i>Mangifera indica</i> L.	ウルシ	マンゴウ	マンゴー	4, 12
<i>Melia Azadirachta</i> L.	セندان	セندان	インドセندان	4
<i>Mesua ferrea</i> L.	オトギリソウ	テツザイノキ	セイロンテツボク	14
<i>Moringa pterygosperma</i> Geartn.	モリンガ	モリンガ	ワサビノキ	4, 8
<i>Musa sapientum</i> L.	バショウ	バショウ	バナナ	3, 4
<i>Nelumbo</i> spp.	スイレン	ハス	—	9
<i>Nymphaea</i> spp.	スイレン	ヒツヂグサ	—	19
<i>Panicum Italicum</i> L.	イネ	キビ	—	1, 7
<i>Panicum miliaceum</i> L.	イネ	キビ	(チーナカ)	7
<i>Phellodendron amurense</i> Rupr.	ミカン	キハダ	キハダ	11
<i>Phoenix sylvestia</i> Roxb.	ヤシ	ナツメヤシ	インドサトウヤシ	7

満久：仏典の中の樹木

樹木学名	科	属	種	頁
<i>Phyllanthus Emblica</i> L.	トウダイグサ	コミカンソウ	アンマロク	3, 5
<i>Poa cynosuroides</i> Retz.	イネ	ポア	クサ草	7, 23
<i>Populus alba</i> L.	ヤナギ	ハコヤナギ	キンドロノキ	15
<i>Populus Maximowiczii</i> A. H.	ヤナギ	ハコヤナギ	ドロノキ	14
<i>Populus nigra</i> L.	ヤナギ	ハコヤナギ	アメリカヤマナラシ	15
<i>Populus sieboldii</i> Miq.	ヤナギ	ハコヤナギ	ヤマナラシ	14
<i>Populus</i> spp.	ヤナギ	ハコヤナギ	—	14
<i>Prunus Zippeliana</i> Miq.	バラ	サクラ	バクチノキ	12
<i>Pterospermum acerifolium</i> Willd.	アオギリ	シマウラジロ	モミジバウラジロ	1
<i>Pterospermum</i> spp.	アオギリ	シマウラジロ	—	7
<i>Punica Granatum</i> L.	ザクロ	ザクロ	ザクロ	4
<i>Rhus</i> spp.	ウルシ	ウルシ	—	17
<i>Rhus Succedanea</i> L.	ウルシ	ウルシ	ハゼノキ	18
<i>Phus vernicifera</i> DC	ウルシ	ウルシ	ウルシ	17
<i>Ricinus communis</i> L.	トウダイグサ	トウゴマ	トウゴマ	9
<i>Saccharum Munja</i> Roxb.	イネ	サトウキビ	ムンジャ草	6
<i>Saccharum officinarum</i> L.	イネ	サトウキビ	サトウキビ	5
<i>Saccharum Sara</i> Aitchis.	イネ	サトウキビ	サラ草	6
<i>Saccharum spontaneum</i> L.	イネ	サトウキビ	ワセオバナ	7
<i>Saccharum</i> spp.	イネ	サトウキビ	—	5
<i>Santalm album</i> L.	ビャクダン	ビャクダン	ビャクダン	5, 9
<i>Saraca indica</i> L.	マメ	アショカ	アショカ	3
<i>Sarcostemma brevistigma</i> W. A.	ガガイモ	サルコステマ	—	12
<i>Sarcostemma intemedium</i> D. DC	ガガイモ	サルコステマ	—	12
<i>Terminalia chebula</i> Retz.	シクンシ	ターミナリヤ	ミロバラン	5
<i>Terminalia belerica</i> Roxb.	シクンシ	ターミナリヤ	セイタカミロバラン	5, 12
<i>Trichosanthes japonica</i> Regel.	ウリ	カラスウリ	キカラスウリ	8
<i>Trichosanthes kirilowii</i>	ウリ	カラスウリ	シナカラスウリ	8
<i>Trichosanthes dioica</i> Roxb.	ウリ	カラスウリ	—	8
<i>Typha</i> sp.	ガマ	ガマ	—	11
<i>Xylocarpus granatum</i> K.	センダン	—	ハウガンヒルギ	7
<i>Zingiber officinale</i> Rosc.	ショウガ	ショウガ	ショウガ	4
<i>Zizyphus jujuba</i>	クロウメモドキ	ナツメ	—	3, 4